

Cover Story

「ティアハイム・ベルリン」

みなさんは、ドイツがペット先進国と呼ばれていることをご存じだろうか。

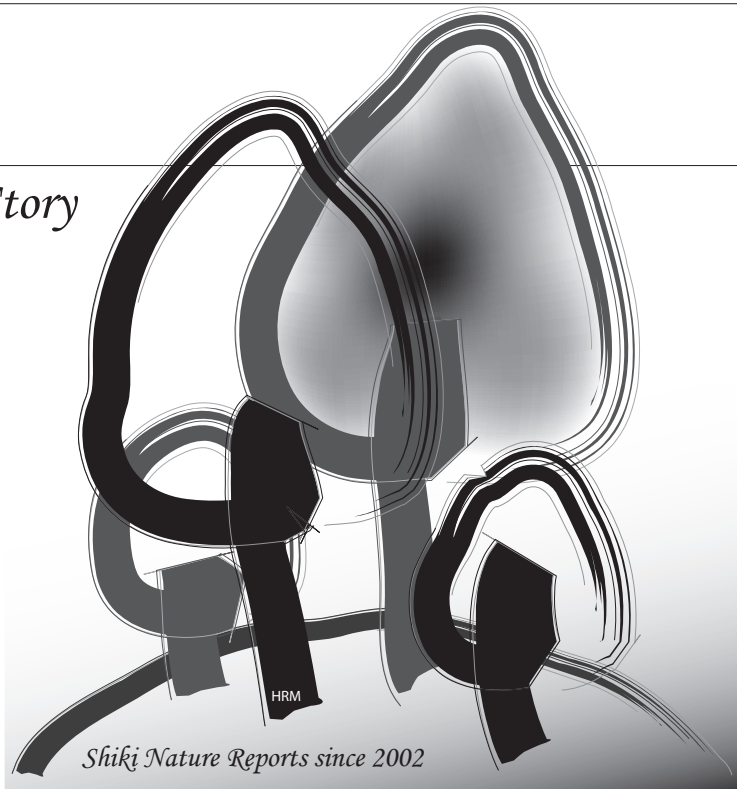
19世紀から、ドイツの法律では動物を虐待してはならないと規定されてきた。20世紀になってナチスドイツが政権を握ると、「ライヒ動物保護法 (Reichstierschutzgesetz)」が制定された。この法律は動物自身のための法律で、動物への虐待を具体的に禁止したものであった。戦後も動物保護法は改定され、1986年には動物を人間の同胞 (Mitgeschöpf) と規定し、現在にも続く法律となった。ドイツでは人間のためではなく、動物の幸福のために動物保護の考えがある。

そのため、現在ドイツにはペットショップはほとんどない。ドイツで犬を飼おうと思ったら、まずは『ティアハイム』 (Tierheim) と呼ばれる動物保護施設に行き、条件に合う子がいるか探すがセオリーだ。そこで見つからなかったら、ブリーダーを探す人が多い。

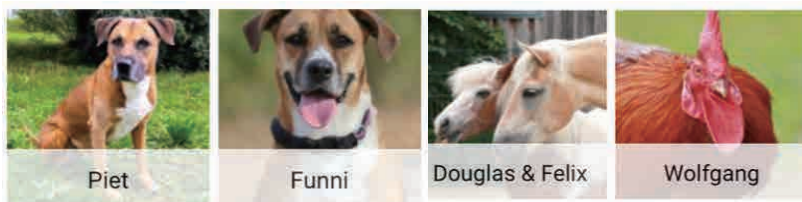
そこで、最も大きな設備を持つ『ティアハイム・ベルリン』を紹介したい。広さはサッカー場22個ほどもあり、そこには猫用の建物が4つ、犬用の建物が6つ、小動物・鳥用の建物が1つ、豚やヤギなど大きな動物用の建物、爬虫類などが暮らす建物が完備されているというのだから驚きだ。

この『ティアハイム・ベルリン』では、様々な事情によって飼育放棄をされたペットたちが獣医や動物専門家らの手厚い支援を受け、新しい家族にもられる準備をしている。ホームページにはたくさんの動物たちが紹介されており、それぞれ名前や施設に来た経緯、生活時の注意点などが事細かに書かれている (全てのペットに名前がついており、たとえばイケメンのニワトリの名前はヴォルフガングだった)。譲渡審査は厳しいが、施設の職員がそれぞれのペットの注意点を細かく教えてくれるため、その後再び飼育放棄をされることは少ないという。

このようなティアハイムの活動により、ドイツは犬や猫の殺処分数がゼロとなっている。日本ではまだまだ殺処分数は多いものの、多くの団体が犬や猫の保護活動をしている。みなさんも、いつかペットを飼うとき、そういった保護施設を覗いて見てはどうだろうか。



(© TVB Archiv)



新しい家族を待つペットたち 出典: <https://tierschutz-berlin.de/>

今回紹介したTierheim Berlin
<https://tierschutz-berlin.de/>

(kurita)

2020年8月18日よりCampbell製の気象測器をラグビー場とソフトテニスコートの隅に設置し自動気象観測を続けています。ようやく1年分のデータが揃いました。今回は「落雷」のデータを紹介します。使用したデータは2020年8月18日から2021年8月10日までの357日分のデータです。

この約1年間に測器が検出した落雷回数は1614回でした。落雷の規模にもよりますが、検出できる範囲は志木高の周囲およそ20~30kmの範囲です。表にあるように6月~9月に多く観測されていて、冬にはほとんど観測されていません。また、落雷があった日数が42日であるの対し落雷回数は1614回ですから、落雷が発生すると1日の間に数10回は雷が落ちる計算になります。みなさんの実感と合っていますか？

さて、357日間の中で最も落雷回数が多かったのは2021年7月12日、志木高の周囲に537回も雷が落ちました。この日の夕方、私は学校にいましたが、青い稲妻がピカピカ、時折近くに落ちる激しい雷鳴、いや爆音がありました。火災報知機も鳴り校内にも何回か落ちたようでした。ちなみに第2位は2020年9月5日で271回、このときは測器に直撃したようで、雷雨が去ったあとに見に行くと、測器から焦げた匂いがして電源装置がやられました。(詳しくは昨年9月号に掲載しました。)第3位は2021年7月29日で148回でした。

落雷のセンサーには志木高から落雷地点までの推定距離も測っています。遠くの落雷を1回だけ検出したという日もあれば、上の例では1km以内(これ以下の表示はない!)が連発しました。そこで、その日に検出できた落雷回数と落雷地点までの距離のうち最も志木高に近い距離の関係をグラフにしました。上の例の第1位から第3位の1km以内は1kmとしました。横軸が落雷回数、縦軸がその日の落雷地点までの最短距離です。なお、グラフを見やすくするために横軸は対数目盛をとっています。

予想はしていましたが、グラフのプロットは右下から左上に広がっています。つまり雷雲が近くを通ると落雷回数が多く、遠いと少ないということです。特に、落雷回数が10回以上では、あるラインより上に点がありません。横軸が対数(片対数グラフ)なので、定性的ではありますが、雷雲に近づくほど落雷回数は指数的に増加すると言えます。もっと観測サンプルを増やせば、もしかすると落雷の予想ができるかもしれないと思っています。

表 2020年9月~2021年7月の落雷日数

年	月	落雷があった日
2020	9	9
	10	1
	11	0
	12	0
2021	1	0
	2	0
	3	2
	4	3
	5	5
	6	11
	7	11
合計		42

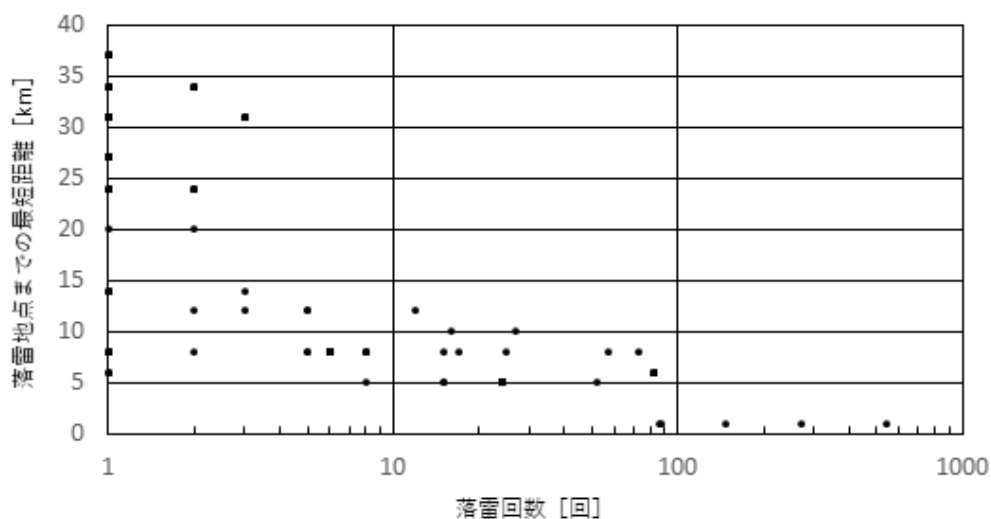


図 落雷回数(横軸、対数目盛)と落雷地点までの最短距離(縦軸)の関係

8月は戦争と平和について考えるべき月。なのに今年は五輪とコロナ禍でそれが薄れてしまったように感じる。そんな中学生からの投稿が8月27日の東京新聞朝刊に載っていた。やや優等生的過ぎる気もするが、私も同感なので、今回はアジア・太平洋戦争末期に描かれた1枚の絵を紹介したい。

横208.0cmの大きな画面、ほとんど真っ黒な背景に、寄せ書きのある日の丸で顔を覆われた一人の兵士が横たわっている。戦死した日本兵だ。天皇に見せるため、陸軍省の依頼で描かれた小早川秋聲(1885-1974)の《國之楯》(1944年、1968年一部改作)である。戦死者は「英霊」として讃えられた時代だが、その絵は「厭戦思想」を喚起するおそれもあった。そのためか陸軍は受取を拒否。一方で、師団長や将校たちは完成した絵を前に脱帽敬礼したと伝わる。当初、兵士の背景に描かれていた光輪と桜の花は、戦後、画家自身の手で黒く塗りつぶされた。タイトルも当初は《軍神》で、戦後《國之楯》と改題されている。

私がこの絵を最初に見たのは、2016年の秋、広島市現代美術館で開かれていた特別展「1945年±5年 戦争と復興：激動の時代に美術家は何を描いたのか」の会場だった。この年、3年生は見学旅行で広島を訪れ、この美術館を訪れる選択肢もあったので、当時の3年生もこの絵を見たはずだ。彼らの感想は残念ながら聞いていないが、展示作品の中で、最も強く印象に残ったのが《國之楯》だった。

3年後の2019年秋、京橋の画廊、加島美術で小早川秋聲の個展が開催された。《國之楯》がもう一度見たくてこの展覧会を訪れ、秋聲がどんな画家だったのかを知って、ますます興味を持った。父は鳥取の浄土真宗寺院光徳寺の住職小早川鐵僊、母は兵庫の旧三田藩主九鬼家の九鬼こう。秋聲は神戸の九鬼子爵邸で育ち、9歳で出家するも、画家を志して日本画家の谷口香嶠に師事。1914年以降、文展や帝展(いずれも政府主催の展覧会)で活躍したが、この時代の画家には珍しく、北海道・中国・インド・ヨーロッパまで、国内外を広く旅行して画業の糧にした。また、早くから従軍画家として戦地に赴き、多くの戦争画を描いている。そのため、敗戦直後には戦犯として捕まることも覚悟していたという。

たとえ描いた画家を知らなくても、見る者に何かを訴えかける迫力が、この絵には備わっている。ただ、画家のことを知ると、戦後の加筆と改題の意図を想像したくなる。戦地の現実を知り、僧でもあった画家にとって、戦死者は絵の中だけの存在ではなかったはずだ。国家が守るべき一般の国民が逆に「國之楯」とされ、それに絵筆で加担したことに対する懺悔が込められたのかも知れない。翻って、冒頭の中学生ではないが、一度始めた無謀な戦争が止められず、国民の命を軽んじた時代への反省は、今あらためて必要になっているように思う。

ちょうど今、小早川秋聲の本格的な回顧展が京都文化博物館で開催されている。緊急事態宣言下で京都までは行き難いが、この展覧会は10月9日より、東京駅駅舎内にある東京ステーションギャラリーに巡回する(11月28日まで)。《國之楯》も展示される。2021年の志木高生は、この絵をどう見るだろうか。



小早川秋聲《國之楯》 京都靈山護国神社蔵
(鳥取・日南町美術館寄託)
展覧会図録『1945年±5年』より

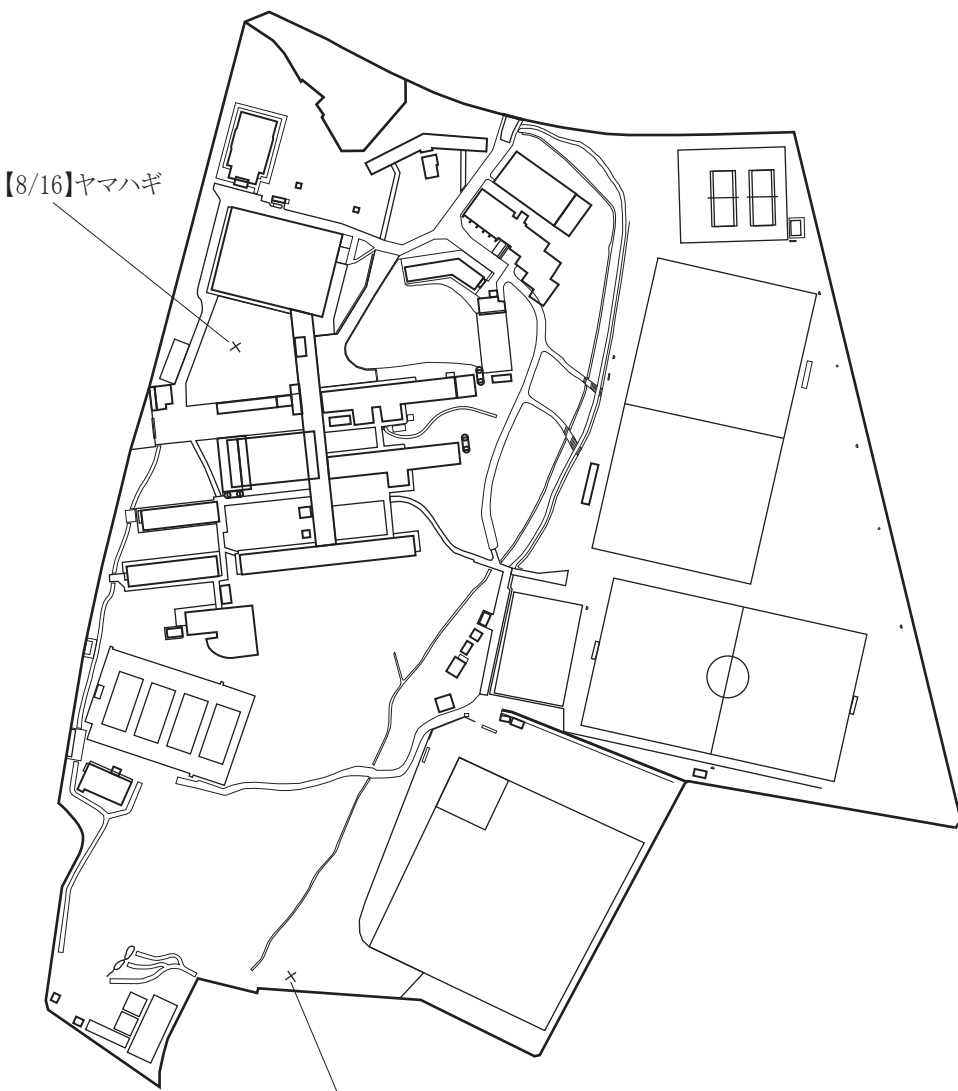
8月から9月にかけて、林の小径の林縁などで、30cm程度の花穂の上に小さく赤い花が連なって咲く植物を見かける。「ミズヒキ」という。タデ科の多年草だが、この花、上から見ると紅、下から見ると白で「紅白の水引」に例えて命名された(「水引」が何かは日本人の常識として知っておきなさい)。わずか数ミリの花を丁寧に見る人は少ないが、4枚の花弁、四隅+中央で5本の雄蕊を持つ。雌蕊は、先端が二股に分かれていて、受粉して種子ができると「伸びて先端が鉤針状になり、動物の毛皮などに付く」という面白い性質がある。8月、初秋の季題でもある。

[2021年7月～2021年9月までの開花情報]

Grass

- 19. Jul.2021 ママコノシリヌグイ, ガガイモ, ミョウガ, ヤブラン, ヒヨドリジョウゴ, チドメグサ
- 28. Jul.2021 オオツツラフジ, キツネノマゴ, コニシキソウ, ヒメムカシヨモギ
- 6. Aug.2021 ミツバ
- 8. Sep.2021 ナンバンカラムシ, ツルボ, ヤブタバコ, ヒメムカシヨモギ, ヒナタイノコヅチ

Wood



花の付き方拡大図

花の拡大図

【ミズヒキ】タデ科ミズヒキ属

(Miyahashi)

この限られた紙面では、名前の出ている植物や動物がどのようなものであるかをお示しする事は不可能です。名前を手がかりにぜひ図書館などで一度調べてみてください。

執筆・担当区分	動物・環境	井澤 智浩 (Izawa)
	天文・気象	樋口 聡 (Higuchi)
	歴史・美術	原 浩史 (Hara)
	動物	栗田 くり菜 (Kurita)
	植物・地質 他[&発行責任]	宮橋 裕司 (Miyahashi)
	編集・植物画	荒巻 知子 (Aramaki)